

中央環境審議会自然環境・野生生物合同部会

「新・生物多様性国家戦略の実施状況の点検結果（第2回）」に関する意見概要

（1）点検の方法について

- ・数値的評価を用いることや自治体、企業・民間団体の取組の記述の充実などが図られており、第1回目の点検に比べて、第2回目の点検はよくなった。
- ・従来型の事業がどう転換されたかということが重要である。
- ・従来型の事業の評価において、新・国家戦略に沿っているかどうかによって評価するような取り組みが始まれば、変わっていくきっかけになる。
- ・自然再生事業は、自然再生事業として項目を立てて点検を行っていく必要がある。
- ・地方公共団体の取組について、どういう問題があって、どういう効果が出ているのか、また、国としてそれにどう取り組むのかといった評価が必要である。

（2）生物多様性の普及啓発について

- ・市民や住民にとって国家戦略にどのように関わっていったらよいのかが見えてこない。特に女性の認識が低いと言うことは、肌で感じられない問題になっているということ。理念も大事であるが、どのように見せていくかということも重要である。
- ・コウノトリを飛ばすことは、絵になって具体的である。しかし、現行の国家戦略は目に見えてこない。国家戦略を見えるようにすることが重要である。
- ・国家戦略という言葉には違和感がある。認識が低い一因では。サブタイトルを付ける、一般向けの言葉を考えることが必要である。
- ・戦略の抽象的テーマについて知っているか、知っていないかよりも、戦略に書かれている具体的なことが知られて、かつ、国民がいろんな形で行動するということが重要である。
- ・生物多様性が知られないのも当然だと思う。委員会では熱心に議論しているが、インタープリターが活躍してこなかった。どうやって伝えるかということも課題である。
- ・国家戦略とか多様性を教える前に、自然とのふれあいなどが重要である。いきなり多様性と言われてもなかなかついてこられない。国民が自然と親しみ、そして自然の知識も得られるような、大きなプロジェクトを作って、その中心に生物多様性があったも良いと思う。
- ・最近では学校で環境教育、環境保全ということを教えているが、むしろ高齢者の方が関心が高いことは、やはり、自然に係わる実体験が不足していることによると思う。
- ・年齢層が若くなればなるほど、植物・動物の具体的な名前が出てこなくなる。トンボを単にトンボとしてみるのと、トンボの中にもいろいろな名前のトンボがいることを知りながら風景を見るのでは全く違う。
- ・自然界の中へ子どもを連れ出そうとすると当然危険を伴うわけで、リスクゼロの社会を求めようとするれば、どんどん自然からは遠ざかってしまう。
- ・認識は低いですが、逆にこれぐらいの人が知っていることを評価してる。少しずつかもしれないが、世の中が動きつつあるという手応えを感じている。

- ・夢のある、よい、協働のモデルをつくり、世の中にPRしていくことが重要である。
- ・県や市町村の方々は国家戦略のことをほとんど知らない、それぞれ多様性の確保のために努力をしており、戦略について知っていると思われれば効果的にできると思われる。地方行政への普及に努めるべき。

(3) 地域における取組の推進

- ・地域の活動に専門家がかかわる体制づくりや、地域におけるコーディネートの充実が必要である。人材の育成が新・国家戦略に書かれているが、もっと積極的に人を投入することも重要である。

(4) 次期国家戦略について

- ・5年ごとに戦略を作るというスケジュールは、自転車操業になっていると思う。もう少し熟成する期間をおいてみてはどうか。
- ・5年ごとに丸ごと作り替える必要はないと思うが、様々な状況の変化を考えれば、リフォームは必要である。
- ・現在の戦略は国民に知らせるトップダウン型になっている。地域では国家戦略を知らなくとも様々な活動を喜々としてやっている例も多く、このような活動をボトムアップでまとめ直してみる視点も必要である。
- ・美しさといったデザイン、景観、風景とか文化といった視点を強調してはどうか。

(5) 三位一体改革について

- ・環境関係の補助金は、金額は少ないが、自然環境の保全に果たしている役割は大きい。しかし、地方に財源が委譲された後、当面の必要性と言う観点から、地方財政において環境関連の予算が削減されると危惧しており、今度、どのようなかたちで自然環境について実効あるかたちで保全を図っていくのかということを考える必要がある。

(6) その他

- ・都市近郊に緑を復元するためには、埋め立て地を活用すべき。